



中国東方航空往復直行便利用 (成田⇄昆明間)

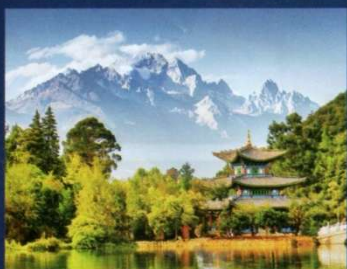
スーパーデラックスクラス(当社基準)を含むホテルに3連泊+2連泊(2~4,5,6泊目)

少数民族が暮らす雲南省

玉龍雪山・麗江古城・石林・シャングリラ 8日間

早期割引

対象出発
2026年
4月~10月
※詳しくはP4をご覧ください



4日目 玉龍雪山

麗江のシンボルであり、「神々の住まう山」と称される雲南省第2の高峰。頂上の白く輝く雪が天を翔ける銀色の龍のように見えることから「玉龍」と名付けられました。ロープウェイの空中散歩で、標高4,506mの水河公園へ！美しい絶景パノラマをご堪能ください。

ロープウェイで空中散歩(注1)



標高5,596m
麗江ナシ族の神なる山



7日目 石卡雪山

雲南省シャングリラにそびえる聖なる山。複雑な地質構造と露出した多数の地層が特徴的です。ロープウェイを乗り継いだ先、標高4500mの山頂は、ヒマラヤへと続く雄大なパノラマが広がる絶景スポットです。

5・6月はシャングリラの花が綺麗に見える季節(注3)



全都市こだわりのホテルにご宿泊！
スーパーデラックスクラスホテル(当社基準)にて
3連泊+2連泊！！

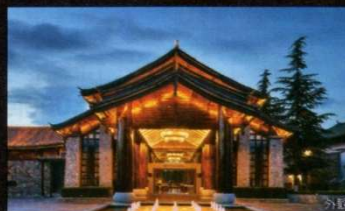
3
連泊

2・3・4泊目 麗江

スーパーデラックスクラス
(当社基準)

麗江和府洲際度假酒店

麗江の雰囲気にも合致した伝統的な外観と木目基調の温かみのある部屋に旅情を掻き立てられます。中心部の四方街までも徒歩10分ほどの距離にあります。



2
連泊

5・6泊目 シャングリラ

スーパーデラックスクラス
(当社基準)

シャングリラホテル香格里拉

シャングリラグループの名を冠するシャングリラの中心地にあり、美しい松贊林寺へも徒歩圏内(約800m)と、周辺の散策にも便利なホテルです。



バス1台20名様限定 おひとり様2席利用(2日目～7日目)

スケジュール ◆印はクリスタルハートの特色

1	日本	◆ご自宅から空港へのスーツケース宅配(おひとり様1個)サービス付き。 ビジネスクラスご利用の場合、空港ではラウンジをご利用いただけます。 15:20:東京(成田)発→空路、中国東方航空(直行便)にて昆明へ。 20:20:昆明着後、ホテルへ。【昆明泊】 ☒ ☒ ☒
2	昆明	◆2日目～7日目の専用バスはおひとり様2席をご利用いただけます。 午前:石林へ。世界遺産石林観光(▲電動カート利用で○石林を観光します)。昼食は石林ダックなどの名物料理をご賞味ください。 観光後、昆明南駅へ。着後、高速鉄道(2等車)にて麗江へ。 夕食は過橋米线などの名物料理をご賞味ください。【歩く度2】麗江泊 朝昼夕
3		終日:世界遺産麗江古城にてフリータイムをお楽しみください。 夕食は麗江名物料理をご賞味ください。【麗江泊】朝昼夕
4	麗江	午前:聖なる山、玉龍雪山(5,596m)大展望へご案内。 楽々ロープウェイにて4,506m氷河公園展望台より麗江のシンボル玉龍雪山の主峰を間近に眺望できます(注1)。 その後、玉龍雪山の麓の紺碧の湖○藍月谷へ。 観光後、中国映画界の巨匠、張芸謀(チャン・イーモウ)監督がプロデュースした総勢500人からなる巨大屋外ショー○印象麗江鑑賞(注2)。その後、麗江へ。夕食はキノコ鍋料理をご賞味ください。【歩く度2】麗江泊 朝昼夕
5		午前:石鼓鎮へ。茶馬古道の○石鼓鎮と○長江第一湾を見学します。 観光後、虎跳峡へ。玉龍雪山と哈巴雪山に挟まれた○虎跳峡観光(世界自然遺産・三江並流の一部)。☆茶芸館にて雲南茶の試飲をお楽しみください。 その後、シャングリラへ。【歩く度2】シャングリラ泊 朝昼夕
6	シャングリラ	終日:シャングリラ観光(富士山ほどの高地に広がる草原地帯○ナバ海、「小ポタラ宮」と言われる雲南省最大の仏教寺院○松贊林寺、○少数民族民家訪問、○独克宗古城散策)。 夕食はチベット料理をご賞味ください。【歩く度2】シャングリラ泊 朝昼夕
7		午前:藍月山谷石卡雪山へ。○石卡雪山観光(標高4,500mの雪山をロープウェイを利用し頂上へ(注1))。その後、シャングリラ駅へ。 着後、シャングリラ駅より高速鉄道(2等車)にて昆明駅へ。 着後、ホテルへ。【歩く度1】昆明泊 朝昼夕
8	昆明	◆ビジネスクラスご利用の場合、空港ではラウンジをご利用いただけます。 08:00:昆明発→空路、中国東方航空(直行便)にて帰国の途へ。 13:50:東京(成田)着。通関後、解散。 ◆空港からご自宅へのスーツケース宅配(おひとり様1個)サービス付き。【軽便】

スーパーデラックスクラスホテル(5泊)

スーパーデラックスクラスホテル(2泊)

3日目 ご希望の方は古き良き町並み・麗江古城散策

人口の半数以上をナシ(納西)族が占めており、ナシ族の風習や象形文字のトンパ文字などの民族文化を現代に伝える古都。石畳の狭い路地が迷路のように入り組み、水路とともに古き時代の面影を残しています。



4日目 巨大屋外ショー印象麗江鑑賞(注2)

世界的に有名な映画監督チャン・イーモウ氏がプロデュースした巨大屋外ショー。玉龍雪山を背景に総勢500名からなる壮大なステージをお楽しみください。



6日目 独特な仏教寺院 松贊林寺

雲南で最も古く最大のチベット仏教の寺院。大殿は5階建てのチベット式建築で、主殿の上層には鍍金銅の瓦を敷いており、反りあがった軒には動物の装飾が掛けられ、大殿は仏教の吉祥数を表す108本の木柱によって支えられています。



6日目 ナバ海

高地に広がる草原地帯。夏がすぎると水を蓄えた湖となり、乾期には湿地の草原になります。夏はチベット族が放牧にやってきて、すっかり緑一面になった草原をヤクが闊歩します。



2日目 石林

風雨による浸食や地震によって岩山が削られた結果、鋭い石山が数多く出現しました。その姿が石の森林のように見えることから「石林」という名が付けられたと言われています。

■出発日と旅行代金(おひとり様(2歳以上)2名様一室ご利用の場合) ※○印は催行確定日、□印はお問い合わせ多数

出発日(2026年)		旅行代金	
		エコノミークラス LR599FY	ビジネスクラス LR599FC
5月(11月)	綺麗な花が咲くシーズン	389,000円	589,000円
6月(8月)			
8月(10月)	祝日含む	449,000円	649,000円
9月21(月・祝)	連休含む	429,000円	629,000円
10月(26月)	大阪より添乗員同行(注4)	409,000円	609,000円
おひとり様部屋追加代金(相部屋不可)		100,000円	

※幼児(2歳未満)の参加はご遠慮ください。

※ビジネスクラスご利用の方は、空港のラウンジが利用できます(往路:成田/復路:昆明)。

※燃油サーチャージ(目安)15,400円:2025年10月1日現在。今後、原油価格の変動により金額が変更されることがあります。※国際観光旅客税、国内空港施設使用料、旅客保安サービス料、航空保険特別料金、海外空港諸税が別途必要となります。

■最少催行人数:10名 ■食事回数:朝7回・昼5回・夕6回(車内食・軽食を含む、機内食を除く)

■添乗員:同行(注4) ■利用航空会社:中国東方航空 ■航空機の利用クラス:LR599FC:ビジネスクラス

※成田→昆明間、LR599FY:エコノミークラス

■高山病について 当コースでは最高標高地点4,506mの高地を訪れます。頭痛や吐き気といった高山病(高度障害)を起こす場合があります。滞在中には無理な行動は避け、普段より水分を多く摂り慎重に行動することが大切です。また普段から体調のすぐれない方は事前に医師とご相談の上、お申込みくださるようお願い致します。万が一に備え海外旅行保険に加入されることをおすすめします。

■利用ホテル一覧表 (SDX):スーパーデラックスクラス、(DX):デラックスクラス(当社基準)

昆明	滇中麗景温德姆酒店(長水空港店)(ウインゲートバイウィングダム昆明空港) (DX) [指定]
麗江	麗江和府洲際度假酒店(インターコンチネンタル) (SDX) [指定]
シャングリラ	恬居香格里拉大酒店(シャングリラホテル香格里拉) (SDX) [指定]

※3名様一室は承ることができません。3名様でお申し込みの場合、おひとり様部屋追加代金が必要となります。

■注意事項についてはP3-4をご覧ください。 (注1)天候により、ロープウェイが運休となる場合がございます。その場合は、代替観光へご案内させていただきます。 (注2)雨天時は上場中止となります。 (注3)花の見頃は自然現象のため例年と前後する場合がございます。見頃は現地手配会社調べ。 (注4)10/26出発は関西空港より添乗員が同行となるため、昆明空港のゲートにて、集合・解散となります。 ※当コースは当社他支店との共同催行となる場合がございます。 ※石林の世界遺産正式名称は「中国南方カルスト」です。 ※天候によっては山がご覧いただけない場合がございます。 ※現地事情により、行程順序の入れ替えや代替観光となる場合がございます。

◇プロローグ

「毎年今頃、10日くらい来ているんですよ」

昨日船泊病院前バス停で見かけた人に、桃岩展望台で、また出会った。ガイドのようで、ガイドでもない…不思議な人に、久しぶりの夫婦記念写真を頼んだら、まずそんな自己紹介。福岡からで、常宿もあって、徹底してこの季節の礼文の花を楽しんでいるのと言う。



《桃岩展望台で。猛烈な風》

猛烈な風に、返事もままならないが、「これでも、ましな方」と余裕の笑み。草原になっているということは、まさに風衝草原だからであるが、ポーズをとっておれないくらいの強風なのだ。

それでも二日続けてとなると、それなりにお馴染みさん…「あの団体がこっちへ来る前に、お花畑に行きましょ」に誘われ、結局、ずっと花ガイドをしていただくことになった。

花の名前では負けない？が、どこに咲いてるの、アングルは柵が入った方がいいの…やたらと通。花好き知人の庭まで見せてもらった。元は教師だったこと、写真の加工で保護者に喜ばれていたこと、海外にも出かけており、今は礼文島通いをして、天候も見ながら7つのコースを全て回るのをルーティンにして楽しんでいると判った。だから、途中ですれ違った地元民とも顔馴染だった。

今回は珍しく、夫も参加。というか、私の壮大な「遊行期計画」では、留守が続いてしまう。それをぼやかす(笑)ための、無理やりの勧誘。「クマがいない」「高山植物が海岸線から咲いている！」そして、「有給休暇

を取るのは労働者の権利！使わないのを誉める奴はいない！」と誘い、その気にさせ、まず外堀を埋める。



《レブンコザクラ》

夫はコロナの間に脊椎管狭窄症がでてきたようで、近所の、姉の墓参り散歩くらいにも痺れがでてくるようになった。それに能登地震、クマ騒動が重なっていった。幸い、痺れは理由も判らぬうちに収まってくれたけれど、クマはますます横暴になり、山行きの弾みがつかない。このままではまずい！体を動かすことも、気晴らしも、必要だ。その後は誘って卯辰山通いに励み、内堀を埋めた。それは私にも必要なトレーニングだった…。

ただ、今回の「礼文島フラワーハイク」とは、実は名ばかり。「8時間コース(16.5km)」とはあるが、それに「スコトン岬」からを加えたら、それ以上(23.6km)となる。ほぼ丘陵状態にしても、並の距離ではなかった。まさに花に目もくれず、ひたすら歩かねばならない。しかも、車道が並走しておらず、エスケープできない。また、せっかくその時期でありながら、レブンアツモリソウの群生地には立ち寄らず、レブンウスユキソウの方を出して、錯覚させている。

ピークハンター塚本添乗員のやりそうなこと…(すでに20年の付き合い)であった。私自身は、せっかく5月下旬の企画なのだから、天候と現地状況を見て、レブンアツモリソウを見られる軟弱コースへ端折るつもりではいた。

さて、5月30日～6月2日のこのツアーは、公共交通機関ばかりを利用するため、たった6名でも成立

したのだ（塚本添乗員が、青春の思い出の地を歩きたかった？）。そのうえ、天候は最高となった。



《レブンアツモリソウ》

舟田夫婦は、5月31日は岬巡りコース（12.4km 5時間 20分）、6月1日は桃岩展望台コース（7.1km 3時間 40分）で、ゆったりと花を満喫した。

一方、4人の本隊は、初日は路線バスに乗り遅れ（そうなるのが常識！）、2日目はさらに赤線をつないで知床までの完全縦走をやりとげた。寄り道になるレブンアツモリソウはカット、2日目のレブンウスユキソウ群生地もまだ咲いておらず、花の礼文どころか、まさにトレーニングそのものだったらしい。でもそちらでの達成感があっただろう。



《利尻山と花々》

山屋には、利尻登山のおまけ扱いの礼文島。でも、花を見て、その背景に利尻山があるというのもいい。登山シーズンにはあと2週間強はあり、眺める利尻山

は残雪付きがなおかつよかった。79歳と、75歳夫婦には、そんな利尻山で十分だった。

翌日は利尻島を一周してから帰る。その晩から、台風6号の影響が出てきて欠航ばかりになったから、実に幸運だった。その時同行したH氏は、昨年の利尻登山帰りでの礼文島では3m先が見えなかった…と言っていた。礼文島はそんな天気の方が多いのだ。2026年夏は、「礼文島が大当たりだった」で、いいかも。

さて、インド紀行の草案と、写真ピックアップは、礼文へ行く前に仕上げてあった。インドを頭から出し切らないと、次の中国が入力できない…と思ったからだ。



《秋なら見えるはずの玉龍雪山》

過密スケジュールのせいで、記憶も混乱となったら、お粗末すぎる！火事場のくそ力と言うか…やれるものだ。時間が余っていると、逡巡の時間ばかりが長くなる。決して吟味、十分校正した…に、なるわけではない。自分の集中力に関しては、そう思う。

5日には悟が、午後の休みを取った…と寄っていったので、写真を嵌めこんでもらい、仕上げられた。結果、最速での仕上がりになった。

こんなふうで、パート介護職は、とっくに昔話になっている。つまりは、とりたてて記憶に残るほどの時間でもなかったわけだ。

どの仕事にも、嫌なことは必ずあって、それでも、工夫しての手応えや、成長みたいな部分はあった…。

自分が頑張った時間として、それをなつかしく思い出すことはあった。

職業に貴賤はないが…今振り返れば、結局は、質の違う仕事だったようだ。これまでは、結果がでたり、その後の未来が楽しみだったり…があったが、それらが「ない」仕事なのだ。いろいろな価値観があるが…未来につながらない仕事というのは、結局は「徒労」にしかならない。忘れ去られる仕事、対価があっても、消えてしまう仕事なのだ。今後、さらに薄れて、思い出しもしないことだろう。



《チベット寺院は金ピカ好み》

阪急の「クリスタルハート」というシリーズには、トランク搬送サービスがついている。その分、しかと加算されているということだが、6時の始発に乗るためには、金沢駅までの歩きになるから、久々に利用とする。

「集荷は6日の午後」とオペレーターが言うから「そのころだと百万石まつりのパレードの交通規制がかかります！」と答え、午前の集荷になった。



《中国茶の店》

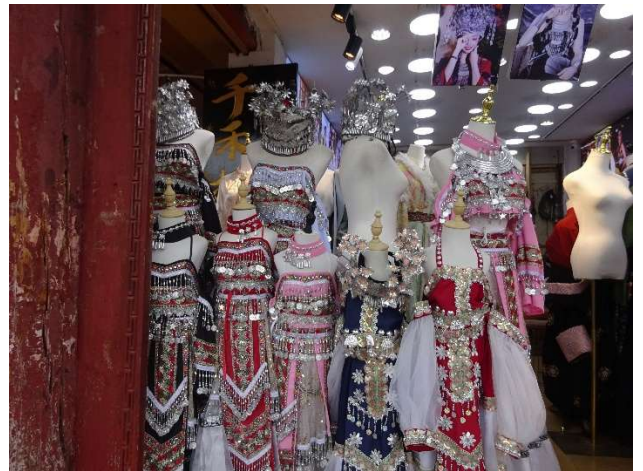
今年の祭りの利家役は、大河ドラマ「豊臣兄弟」に出演中の大東駿介で、盛り上がっている。出演者も観客も、それなりのエネルギーで関与しているわけだ。それを、我が家のテレビで涼しく見る。

高橋添乗員からの電話も入った。添乗員なしの緊張ツアーを続けてきたから、「成田へ行く」までの自己責任で済む！も、随分気楽なのだった。

◇6月8日（月） 成田～上海～昆明

参加の12人は、夫婦3組、姉妹1組、一人参加が男性1名、女性3名という内訳だった。内ビジネスが4名、エコノミーが8名だったが、上海までと、昆明までと、それぞれが3時間の搭乗だったから、それほど格差が見える広い席でもなかったし、ラウンジに立ち寄る時間もそうなかった。

そのたいしたことなさそうなビジネス席で、むずかる赤ん坊に、I氏が「うるさい！」と怒鳴り、周囲も親も困らせていたようだ。



《少数民族のレンタル衣装》

そのI氏とは、翌日の高速鉄道では隣になったので、話した。3年前に妻を癌で亡くしたこと。中国語が話せるのは、42歳で起業して28年間、中国との貿易を仕事にしていたから。それを譲渡し、さあ遊ぶかの時に妻に癌がみつかり、1年後亡くなったという。事業は成功し財を成し、息子二人も独立し、自身はシングル自立ができているが…。高校では応援団長をやったように（怒声で仕切る）、全てにワンマンを通してきたい。それに人工関節の不具合も重なってしまった。妻は、2歳上の姉の友人で、「正夫ちゃんはまだ独身？」

と聞いてきたように妻の方が先に気があってのご縁だったという。

3回忌を済ませた今回は、男達には皆妻がいて楽しくやっているのに、自分はなんでこんなことに…といたく気に障ったようだ。不機嫌顔で、あらゆるシーンに不満を言い、自己都合を通し、手をかけさせて、ツアーを不快色に染めたのだった。

同じ上海便に赤のトラピックスを見つけた。それは名古屋発で東京発と合流で、ほぼ同じ行程であって、7日間。

待合室で、おしゃべりおじさんが「クリスタルはリッチなホテルなんだよ。こっちは 29 万円で安いんだよ。ハハハ」と言った。

こっちは山のようなカタログに迷惑しつつ、されど見なければ探せないしと、チラチラ見をやって、このツアーを見つけていた。今頃「そもそも、クリスタルハートってなんなの？」をやっている。

阪急グループ内では、より年配者向けの、ゆったりコースのシリーズらしかった。ただ、初見では、どこがどうゆったりになっているのか、比較までできないのでは？…と思う。どうやら会社は「年齢を見て」、送付カタログを選別しているらしい。だったら、4500mの標高を、そう案じなくてもよかったのかもしれない。

どちらにせよ、平均年齢の低かった直前のインドに比べたら、たしかに高齢者ばかりだったのだ。



《ナパ海のヤク》

終盤、徐々に判ったが、H夫婦の奥様が82歳で、その夫が一番高齢。もう百名山は無理だからと、関東百

名山を登るようにしているらしい。身軽に動いているけれど、山ツアーは年齢で断られてしまうと言う。「花の時期がなかなか合わない」…と言っているが、どうも漠然の情報だけで出かけているらしい。夫婦だけで判断し、一般的な知識の inputs が不足しているようで、花の名前も知らなかった。



《ワスレナグサの仲間》

福岡からのS夫妻は、78歳と75歳で、大柄なご主人が、不整脈などを出すようになってきたらしい。元は山好きで、今は息子が山遊びを始めているそうだった。海外旅行へはあちこちに出かけ、ペイペイがどこでも使えて便利と言っていた。私と同年齢の奥様とは、帰りの高速鉄道内でずっと話すことになった。息子も同様に内科医で、結婚後の息子家庭にはやはり口が出せないけれど、娘が話し相手になってくれるとのことだった。



《印象麗江の踊りの衣装》

苦虫I氏が77歳であって、S氏とは、学生時代にごく近所に住んでいたと判った。ようするにベビーブー

ム世代であり、学生運動が甚だしかった世代だ。大学時代は勉強などしておらず、新島でスキューバダイビングをやっていたらしい。そんな昔にスキューバダイビング？そして、あの伊豆諸島の新島？「氏は新島に行っていたと言う。なるほど、能登半島がカニ族のブームになっていた時代、あの新島が関東圏では、それに相当したのだ。こんな所で初めて、「新島」の背景を確認できた心地がした。

イミグレーションで、奥さんが中国人とはっきり判った O 氏が、禿げ頭で一見年上に見えたが、結局 71 歳で、男性では一番若かった。学生運動盛んな頃…の話が通じたうえ、私の「金沢からです」に、「一期校だった金沢大学には落ちたんだよ」と言った。そう、一期校の二期校のにもやもやし、そんなことで右往左往し、最初の人生の岐路を味わった世代なのだった。

初顔合わせだが、時代の重なる人達なのだった。彼の奥さんは、ついでに里帰りするとのことで、帰路の上海で降りていった。彼がしょっちゅう座を外すのは、ヘビースモーカーだったからだだった。このことにも、氏は「フン、たばこ臭い！」と腹を立てていた。



《トンパ文字の幟》

ビジネス利用の夫婦は O 夫婦だけで、歳の差のありそうな奥さんがなにかと夫の世話を焼いていた。しばしば私達の通訳もやってくれた。阪急の手続きの書類には、「日本国籍の方は…。日本国籍でない方は…」が印刷されているが、今は日本国籍でない客が増えているそうだ。成人式のニュースで、某区の対象者の半数が外国籍というのがあった。留学生の年代だからもある

るが、すでに多くの外国人が日本で生活し、ツアーに出る…もやっているのだ。

やはり中国語が話せる K さんは、還暦後もっぱら中国に絞って、古鎮巡りをしているそうだ。職場では山のサークルに入り、百名山のうちの 70 くらいは登ったと言う。台湾の玉山も登ったそうだ。97 歳の父の末期に、妹と振り回されているそうだ。彼女は誰ともよく話し、ツアーの中での一期一会も楽しんでいるふうだった。

おしゃれな M さんは、もう 109 カ国を回り、残りの国を潰しにかかっている段階だと言う。スマホをフル活用して、ホテルのサービスをチェックしていた。5 人までは無料でコスプレをして、データがもらえる…を実践したり、隙間時間にスパの予約を入れたり、どん欲に現場を楽しんでいた。豊富な経験の中には、モンゴルの乗馬体験で馬が暴走したことや、いろいろがあるらしい。一見元気そうだが、そんな古傷やで中はボロボロ、腎臓も 1 個しかないと言う。朝食で同席の時には、「老後にお金を残したって無意味でしょ」と言い、実際、ビジネス利用だった。「富士山の 8 合目までバス道路がつかないのかなあ。そうしたら、行けるけど」と言っているのが聞こえた。



《サクラソウ》

山形からの N 姉妹は、おしゃべり姉の言うには、妹は早くに旦那を亡くしている。さらには一番下の妹が 3 年前に亡くなったばかりと説明。「でも私は 82 歳よりは下で、最高齢ではないわよ」とぼやかす。山形だけに、今もスキーで遊ぶが、書類などは「ねえ、どこに書くの?」「なんて書くの?」と、妹に頼りっぱな

しだった。だから「パスポートがない」で大騒ぎも2度ほどあった。スマホで撮っているから、「凄いですねえ」と言ったら、「でも、いつのまにか消えているのよ。訳が分かんないけど、いいわ!」といった調子。それでも姉妹なら、会話ができるし、気楽に動きやすいだろう。

そのように、やはり高齢者揃いのメンバーだった。私の方が、ツアーレベルの認識不足で、高山と思い込んでピリピリしていたのに、他の方は、「クリスタルハートのツアーだから」…と随分と鷹揚に対処している風だった。

なお、これまでのグチグチ紀行の中に触れたように、第1回の玉龍雪山ツアーは潰れている。そのうえ、後の3回も、実はもう消滅していた（最終日にそう聞いた）。日中関係はさらに冷え込んでいく一方で、つまり今回が今年唯一の、玉龍雪山ツアー。一期一会の機会だったのだ。



《麗江南門のライトアップ》

さて、広い上海空港では、機体はいつまでも滑走路を走っていた。イミグレーションでは私はやはり、指紋チェックなしだ。このあたりのスムーズさは、中国が一番進んでいると思う（ちなみに、中国行きが2度続いた時、土産店で、前回買ったと同類をいきなり勧められた。データが漏れていると感じたが、さて?…）。今のところ、アメリカが一番、働く気なし、急ぐ気なし、いざとなれば手動、言葉なし、取得データを活用する気なしだ。

乗り継ぎは、乗り継ぎシールを胸に貼り、ショートカットドアを通過すれば、すぐ国内便の出発ゾーンにつながった。



《朝食の麺類コーナー》

小型機になった昆明（こんめい クンミン）行きでは、軽食が出て、光の町へ降りていく。

雲南省の省都・昆明は1900mの高原にあり、1年を通して気候は穏やかで緑が絶えないことから春城と呼ばれている。多くの花が日本にも輸出されているそう（BS鉄道の旅でも、そう取材されていた）。雲南省だけで日本より大きく、中国では8番目の面積。東南アジアに近く、麗江まで伸びた高速鉄道は、将来的にはラオスにまでつながる予定。

北にパンダの四川省、東に貴州省…それらは少数民族で有名な一帯だ。今回は、北へ麗江、シャングリラとつながり、チベット自治区へと行って、茶馬古道そのものになる。



《民族服の園内ガイドたち》

横断山脈にかかっているから、山は高く、谷は陰しく…だから、いくつもの民族に分かれての文化にもなった。今、それらは高速道路や高速鉄道でつながり、少数民族としての懐柔策も受けている。身分証明書に民族名が書かれているようだ。

買い物の際、翻訳アプリをスワイプするのを見たら、漢字での言語がずらっと並んでいた。ちなみに少数民族だけで、26 いて、さらには北京語、上海語となっていくのだ。中国こそは、そんな機器を必要としていたかもしれない。

空港近くのホテル…立派だった。が、窓の下はまだ、造成中の景色が広がっていた。カートリッジ式のコーヒーマーカーで、一杯やった。

5 日おいてすぐピレネー行きになる。一人部屋をいいことに、紀行の下書きをしていくことにする。

◇6 月 9 日（火） 昆明～石林～麗江

麺類の多いbuffet。九寨溝が、座席も足りない、あまりにひどいbuffetだった思い出があるが、まあピンからキリだろう。



《ガイドのヤンさん》

現地ガイドは楊（やん）文印さん。小柄な六角精児のイメージ。貴州省出身のミャオ族で、その通りに、背は低く、顔が丸く、鼻が低い…と自嘲する。

半年ほど日本語を使わなかったから、少し怪しいかもと言う。もっと多かった日本へ爆買いガイドの仕事も全滅して、大変だったらしい。日本語ガイドが次々転職していると言う。

後から追加された話も、ここで書くと、父親は鎮の役人をやり党员だったらしい。一人っ子政策の違約者は逃げるか、罰金を払うか？でもゆっくり払ったり、代わりに家畜を収めたりいろんな手があったらしい。父親はうまく返り咲き、結構な年金をもらえる立場になった。長男にもそのように立ち回ることを望んだが、彼は反発したらしい。そして爆買いガイドの頃には潤ったが、今はすっかり逆境の目に遭っている。妻は 3 歳頃からの幼馴染で、彼女が弟の建設会社に勤務しているおかげで、生活できているようだ。



《世界自然遺産 石林》

90km 離れている石林は、「中国南方カルスト群」として世界自然遺産に登録されている。手近な奇観のオンパレードだが、その分、石には何かと彫り物がされており、「自然景観とは言えない」と、何度も申請が却下されたようだ。今でも唯一「石林」の文字だけが人工物としては残っている。

重点エリアの間は電動カートで結ばれている。ようするに中国南部は大量の石灰岩が隆起し、風による浸食や地震で石柱が残る景色が多いのだ。

「石林」の看板の下に立つ両親の写真が残っている。私の海外旅行では、そうやって両親がいきなりとびこんでくる。無縁の坊さんの読経なんていらない。「私もこうやって楽しんでるよ」と確認するのが、一番の供養だ。今よりずっと社会圧もあった時代に、夫婦で海外旅行に出かけていた。私が外遊に躊躇しないのは、何よりそのお蔭だ。生きているうちに動いて、見て、満足して成仏すればいい。



《花で作った干支の午》

入り口から、大量の花で作った馬や民族衣装の冠のモニュメントが飾られ、花が溢れている。手で触れる場所の岩壁はつるつるになっていて、まさに大理石。昆明の西に大理市があり、そこで良質の石が大量とれるから大理石と言う…を始めて知った。日本にどれだけ中国文化が入りこんでいるか？に、唖然とすることは多々。米国の核の傘を自覚しない日本人は、子供じみたままできて、自国の歴史や立ち位置が判っていない…と思う。



《花と石林》

少数民族地帯であるから、さっそくコスチューム店が出てきた。かつ、これから学校が夏休みに入るから、家族旅行が増えてくるという。豊かになった中国は、大事な一人っ子と家族旅行を楽しむのが、一番の幸せなのだ。そして、アベックでコスプレをして、スマホに撮る…も、最先端の遊びなのだ。

日本のニュースは今も中国の弾圧ばかりを伝えるけれど、観光地へ行く私は、幸せいっぱいばかりを見かける。普通に過ごしていて逮捕されることはないのだ。スリや犯罪に巻き込まれない…は、多くの人にはまず安全だ。自由な国には、犯罪の自由も横行する…

迂闊に電話に出られない国の、どこが自由で安全なのだ？ちなみに中国なら、ストーカー殺人の被害者にも、トクリュウの被害者にもならない。

どのみち誰にも満点の国などないのだ。

ジャスミン他が当たり前に咲いていて、まさに南国なのだった。ヤマモモ売りがいた。柔らかくて貯蔵がきかないヤマモモは、宮尾登美子さんの好物で、高知県の友人に帰省のついでに頼んでいたと言う。だから、私は食べたことがない、その果物の大型だった。楊さんが買ってきて、次々賞味。果物が自然に実る国っていいなあ。それは根本的な性格や人生観に影響していくだろうと思う。



《ヤマモモの販売》

カートがずっと寄ってきて、次へ次へ（つまりは、印象に残らない）。カルスト台地は広大だった。地面が余っていて、掃除が行き届いていて…最後はフラワートレーンと言いたい仕立てのカートで、始点まで。バスに戻った。

ハイアットホテルでの昼食の石林ダックとは、北京ダックのように、皮を食べる？か。10皿ちかくではわからなかった。あとで、薄皮にネギの千切りなどを挟んで、上を留めてあるのが出てきて、そっちかも？だった。



《石林ダック》

高橋ガイドと楊ガイドには打ち合わせ事項がいろいろあって（たぶん、ぎくしゃく関係のため詳細なやりとりができなかった。また、高橋ガイドには1回限りなりの、膨大な現地報告業務があったらしい）、ずっと席を外していたから、どの料理がどれなのか？いちいち聞けもしなかった。

そこから昆明南駅へ。巨大すぎる建物だ。いまや中国の高速鉄道網は45000kmを越え、ダントツの世界一だ。高速鉄道と言っても、そのスピードはG,T,Cなどのランクがあり、Cは最も遅い。山岳地帯を走る麗江行きは、当然にCランクで、その2等席なのである。

高速鉄道といっても、トランクの置き場もない、勝手の悪い車体だった。どこか「乗せてやる」ふうで、乗客サービス本位になってはいないのが、一党独裁の中国だ。他国を真似てもっと快適に良質により、数字に出ることだけを急ぐ…なのだろう。

4時間の乗車時間であったから、ずっとだんまりとも行かず、私は隣の1氏と話すことにした。2歳上なら、部活では勝手知ったる世代にあたるから…。妻ロスで寂しいのかもと「まさおさ～ん」と声掛けしたり、待ち時間には隣に座るようにしたりはした。でも、彼の不機嫌顔で、マイペース…は、そう変わらなかった。



《麗江駅》

麗江駅もやはり巨大。北陸新幹線が、いつまでも「米原經由だ」「いや、やはり、小浜經由だ」と揉めている。その間にも試算経費が倍々になっていくのだ。比べると、全てが国有地で、計画経済でぱっと決まる…がどれだけ効率的かと思う。どれだけ賄賂に消えようと、煮え切らないまま時間が浪費され、税金が無駄遣いされていくよりはましだ。自由という我儘…それが加速されたら、それだって（あのトランプみたいに！）手に負えない。



《ホテルとカート》

麗江のホテル（インターコンチネンタル）は、コテージ（離れ）タイプで、今、麗江一のホテルだという。そういわれても、本館から離れた別棟仕様が、高級にあたり、便利であるとは思えなかった。

分散する前に本館で夕食。名物料理は過橋米線と言ひ、職員が作ってくれると言う。



《過橋米線》

Wikipedia には「煮えたぎったスープと油が入った土鍋に、米線と呼ばれる雲南省特有の麺と野菜や宣威ハムなど生の食材を入れ、熱々のスープで加熱調理して食べるのが特徴」とあった。ともあれ、「熱い鍋に触るな」「作ってくれるのを待て」であった。ようするに、やたらでかいお椀に、春雨が沈んでいる…という代物だった。濃厚スープは中が見えず、掬っても掬っても、まだ春雨が出てきて、完食を諦めた。唐辛子の薬味で真っ赤にしたスープで食べた人もいるらしいが…ややこしきは食べず…で行くことにした。

雨覆いをかけたカートが、トランクと人を運んでくれる。本館に一番近いのが私たちの 207 棟だった。ただ、端の棟だった同乗者がいて、ドライバーがそちらを優先したために、私達の棟を通過して、無用の大回りをやった。それで N 姉妹も、K さんも、不機嫌！さんも「全く訳が判らなくなった」…と騒いでいた。



《207 棟》

やれやれ…とばかり、部屋に入ったら、一人空間が心地良かった。内装がみな木彫りで格子状の中華風。ここに 3 連泊だ。新しい分、水が漏れるもなく、やたらとあるスイッチも、まあまあ照合できた。



《室内の茶器セット》

明日は麗江フリータイム。ひとまず午前中は、ガイドと一緒にざっと土地勘をつけ、午後がフリーになるのだ。備え付けのお茶も、かけ流しの中国茶タイプが用意されていた。また、冷蔵庫内のコーラ、ジュース、ヤシジュースなどは無料だった。

◇6 月 10 日（水） 麗江散策

僻地の豪華ホテルはやたらと広い。みみっちい私は、こんなの掃除がしんどい！と思い、これで高級となり、ホテル代が高くなる…が、虚しい経済と思う。さらには、レストランがどう配置されているか（広い空間の、無意味な無駄使い）などを掴むのも、かなりのストレスと思う。

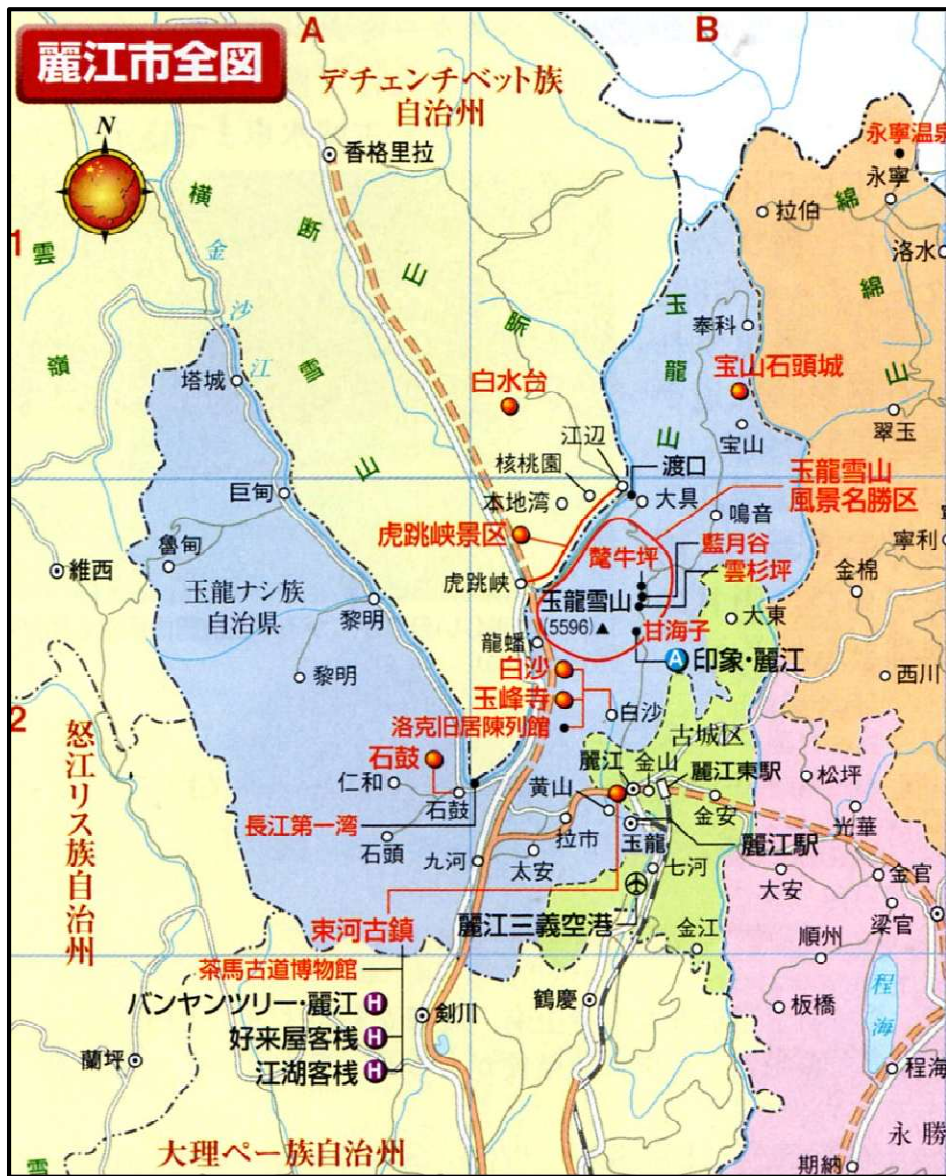
ともあれ、コテージタイプの部屋から出て、傘をさして坂を上がり本館へ向かう（フロントに、電話でルームナンバーを言えば、カートが横付けするシステムだったらしい。I 氏はコテージ玄関で、巡回カートを待つ手法でこなしたらしい）。

カトラリーセットに必ず箸も入っているのが、中国高級ホテル。雲南も、基本的にはピリ辛の味付けのようだ。

麗江は標高 2400m にある、茶馬古道要衝の町だ。ここを支配した木氏一族は、囲むと「困」の字になることから、城壁を作らなかったという。石畳と水路と石橋、井戸などが美しい町並みを作り、それを玉龍雪山などの美しい自然が囲む景勝地として知られた。

それはナシ族の町で、ナシ族は人口の 20% を占める。1996 年の地震で雲南省は大きな被害を受けたが、旧家の多かった旧市街の被害は少なく、修理程度で済んだ。そのことに感心した役人が、翌年には世界文化遺産に登録したのだという。以後、土地（賃貸料のこと？）は急激に値上がりし、ナシ族は豊かになった。ナシ族は納西族と書く。象形文字のトンパ文字が残っていることで有名だが、その読み書きができるのは 10 名もいない…となる。ナシ族女性の民族服にある 7 つの星は、北斗七星が出てくる時刻まで、よく働くという意味らしい。

世界文化遺産になった結果、開発しすぎていけないが、古民居は内装を変えて、宿泊施設か、土産屋か、



「地球の歩き方」より

飲食店になった。それは、金沢のひがし茶屋街もそうで、びっしりと店が並び、観光客が行き交う、騒々しい街並みになる。

さて、ホテルは麗江古城の南端に位置し、敷地からそのまま古城につながる。カードキーでゲートを通過できる仕組みだった。

フリータイムの日であったが、午前中は、ヤンさんが四方街と、獅子山までを案内し、昼食の注文までの面倒を見ると言う。

用水に沿った石畳の路は、紫のブーゲンビリアが壁にかかり、門にはトンパ文字が並ぶ。石畳は昔ながらの五花石という高級な石材だという。瓦の端は、いかにも中国風に反り上がっている。ヤンさんは「中国は見栄張りだから、家を少しでも大きく見せたいため」と説明した。

ここもアルプスの民家と同様、花の維持にはよく気配りしていた。雨季の水遣りはいいとして、くたびれた花を毎日摘み取らねば、花の生垣は維持できない。掃除を含め働き者の人達が、散策できる綺麗な町を保っているのだ。



《花のあふれる街》

町を歩く人は、コスプレが多い。金沢の和服姿など、まだまだ少ない方だ。刺繍や飾りの多い民族服は、ゴムスカートを履き、上着を羽織り、冠をかぶれば済む。和服はもっと着付けが面倒で、ヘアセットが必要で、草履（編み上げ靴の場合もあるが）は動きにくく、ハードルが高い。

民族服には、たいてい、男性用もあり、アベックで変身している。民族らしさを手仕事の範囲で表現するとなると、服への加飾になったのかもしれない。今なら、手っ取り早く、「揃いの T シャツ」といった発想だ。

時節柄、ドンパチやっているより、ずっと平和でいいなあと思う。ただ、こんなお姫様ごっこ、王子様ごっこのノリノリで、結婚するのか？それが続くのか？まではわからない。女性が気取ってあちこちでポーズを取り、男性がそれを写しては一緒にチェックし合う…それは鳥類の追っかけダンスを思わせる。それでも、それで合意して、「結婚しよう！」になるのなら、拍手だ。



《民族服の店員》

四方街はようするに広場。ここから、あちこちに行けるし、あちこちの道が集まっても来る。「ここで解散でもいいが、余力があれば…」で、高台の獅子山にむかう。

石畳の階段を上っていくと、街並みを見下ろす広場があった。雨季であるから、その上に聳えるはずの玉龍雪山は見えない。金沢の黒瓦街並みを見慣れた目には、まあ、こんなものであった。

下りてから解散して、昼食。6名ほどでラーメン屋に入り、牛肉ラーメンを注文。「いいよ、いいよ」と

氏が払ってくれた。なんでも、古いトランクから、100元札が150枚出てきたそうである。ありがたご馳走になる。



《麗江古城の街並み》

それから地図を広げ、大石橋、大水車を回ってみた。木氏が22代470年にわたって暮らした館・木府あたりも見ればよかったかも？まあ、あまりの賑わいに、歓楽街あたりで十分であった。そもそも山歩きは趣味で、自然の景色なら我慢もできるが、街歩きはまず疲れてしまう。

両替はヤンさんが5000円を205元のレートでしてくれた。



《大石橋》

私は前の旅からの残りの人民元が603元あったから、それで、藍染め布、針水晶の腕輪、マニ車のキーホルダーを買い、ヤクミルク、焼きドリアンを賞味。ドリアン店は多くあって、それをアルミホイル焼きにしていた。ひとかけが、25元。焼きバナナというか、焼き紅はるかというか、ねっとり甘い果物であって、

ここで、まさに、半世紀にわたる「ドリアンって何？」も解決になった。



《ヤクの人形》

ヤクミルク？ネパールでおなじみのゾッキョは一代雑種だから、子を産まず、乳を出すこともない。少数民族地帯では高地牛であるヤクが主役になる。だから、ヤクの人形が茶の荷を担いで…なんてのが出てくる。私はネパールのナムチェで、5年越しでそれを探しゲットしている。人形は作られて、どこにでも流れていくが、そこに思い出を絡ませるのは個々の人だ。

今風のスタンドでヤクミルクを注文し、太ストローで吸った。看板に、はにかんだチベット族娘のイラストが描かれている。アジアのハイジ…無垢な娘は、子孫繁栄の価値をもつ。妊娠は女性にとってハンディにもなるが、産めるのは女性だけだ。それがもてはやされたり、貶められたり…。神聖化されたり卑猥に扱われたり…。無垢の微笑みの未来には、欲望に運命に、思惑に、いろいろが交錯していく…「かわいい」では済まない人生…。イラストからそう発想していく私は…後期高齢者なのだった。



《チベット民族の娘とヤク》

傘をさしつつ、そろそろと戻りにかかると、Kさんに出会う。双方意を強くして進むと、迷わず、1回でホテルのゲートにたどりついた。中に入ると「分かんなくてタクシーで戻ってきた」というN姉妹に会った。似た水路が並行しているし、似た小道が曲がりくねっているし…。Kさんと「私達は優秀！」と讃え合う。

ホテル地下の別室で、夕食を囲んだ。雨が激しくなり、夜市行きはとりやめになった。野外の明日の方が晴れてほしかったのだが、高山は9～12度の予報。朝からカップの用意だ。

◇6月11日（木）玉龍雪山 藍月谷 印象麗江

雨の中のバス。ヤンさんの中国語講座は「いくらですか？ポーシャオチェン？」「安くしてくださいシェイインイーデン」であったが、今では値札通りであって、使わないフレーズになるようだった。

中国は、バス停と施設の間が空きすぎで、これにカップを羽織ったりすると、余計もたつく。一人が行方不明になりかけたが、拠点の甘海子 3100m でシャトルバスに乗り、索道駅 3356m に向かう。

酸素缶が配られた。これを吸い続けた場合、5分ももたないそう。つまりは気休め。



《ガスの中の 4506m》

約15分で、上部駅 4506m へ。ゴンドラの途中は雨と蒸気で何も見えない。張家界もそうだったし、雨季のヒマラヤ山系はそんなものだ。玉龍雪山は、麗江の北に聳え、13の峰が南北 35km、東西 12km のエリアに並ぶとある。最高峰は扇子徒 5596m だが、それが見える季節は限られ、かつ稀だ。

着いたところは氷川公園と呼ばれ、さらに展望台 4680m への階段が続いている。ガスと雨の中ではどうしようもない 30 分。そこらに映しだされているのは、秋から冬のくっきり見えているシーンばかりだ。しかもその前で、浅はかポーズをとっている写真ばかり…となると、何のためにここまで来ているのやら? にもなる。雨季のヒマラヤ…。

下りてから、カートで、今度は藍月谷へ。ここには黄龍のような棚田状石灰華が見られるのだ。水量が増して、崩すほどの勢いで流れていた。周囲にシャクナゲなどが少々見えた。



《水量の増した藍月谷》

拠点の甘海子へ戻り、雪厨餐厅に入る。九寨溝よりはましで、4 人用テーブルには一人用の鍋と肉皿が並び、野菜類を集合テーブルから取ってくるのだった。そして、やはり、つけダレの醤油、ごま油、ニンニク、パクチーなどを小テーブルで整えてくるのだ。それら調味料ボールはすぐカラになった。雑が目立つわりに、デザートのカステラが意外とおいしいの評だった。



《一人鍋の昼食》

次が、円形劇場へ。中国映画界の巨匠チャン・イーモウ監督がプロデュースしたとされる総勢 500 人か

らなる、1 時間の巨大屋外ショーだ。少雨決行で、傘はさせないという。その代わり、入り口で、丈夫なカップを貸してもらえる。彼らの方は、蓑状のカップをつけての登場だ。



《舞踊パフォーマンス》



《少数民族が勢揃いのフィナーレ》

正面広場と、斜面に刻んだ段と、上部の回廊を使った屋外民族舞踊パフォーマンス…。まず、鞍をもったの演舞。次にテーブルを持ち編成を変え、女性陣が背負子を担ぎ…。細かい所作ではなく、全体フォーメーションを変え、それを見せ場に行っている。キャラバンが登場したり、交差したり、甲高い歌が響いたり。

終盤は、バスの混雑を心配して、早めに席を立つグループが多かった。私達もやや中座のようにして会場をあとにし、バスに乗車。ホテルで自分のカップ類をおいてから、18 時 30 分、ホテル外の夕食会場に向かう。



《キノコ鍋》

キノコ料理の専門店なのだという。これも九寨溝の続きで食指が動かないが、まず、キノコを20分よく煮てから食すとなっている。二つの鍋が運ばれてそれぞれをタイマーで計るのだった。そうまでして食べたいキノコでもない。マツタケは日本がブームを起こしたらしいが…。干して、戻して…騒ぐほどの材料か？天門山で買った干しキノコは、聞いてみても誰も欲しがってくれなくて、結局、廃棄してしまった。何でも食べる文化は、好ましいとは思う方だが、それを自分が…は、別次元の話。

こちらでは女性が民族服を着ていて、その説明があったり、一緒に写真を撮ったりが、サービスにあたるようだった。



《ナシ族の女性と》

雨がやみ、高橋さんは昨日中止した夜市に行くと言う。ヤングガイドは、「そんなのはありません」と言ったが、そういう細かいあたりは、女性の方が目ざとく気づくようだった。8時半、再集合。

高橋添乗員は、「込み入った町でも一発で覚えらえる特技がある」という。それを標準としているため、かえって家族旅行では通用せず他のメンバーと喧嘩になる…という。私も結構判る方だが、夜はまた景色が違ってしまうから、まずは謙虚に。



《夜の四方街》

夜は、電飾を借りて、さらに騒々しかった。どこの2階からも、ミュージックが流れ、喧噪の渦。これが庶民の繁栄で、これが庶民の自由…。浮かれて、満足している程度なら、無害の民だ。

Kさんが私の話で、どうしてもドリアンを食べたかったそうで、買ってきて、それを一匙ずつ分けた。結局「焼き芋に近い」の感想になった。炙り続けだから、香りが抜けてしまい、そうになかならない。これも、勝手に実ってくれるなら、幸せだ。



《ゲテモノの串刺し》

そこからバス通りに出たあたりに「夜市」の看板があった。カンボジアの時と同じく、ゲテモノの串刺しがあったし、何よりキノコ鍋の露店が多かった。赤のパンツを始め、衣類も豊富。仕事を持つ人には、夜こそが解放の時間か？一般人には、物が溢れている日常が、さしあたりは幸せだ。



《夜市のキノコ鍋》

ここで、ホテルの方向が判らないという台湾人が一緒になる。むこうが、同じホテルに日本人一行がいたのを覚えていたのだ。日本語を話す台湾人、それに中国語で答えるKさんが、しばし交流。その彼女は「先週はシャングリラにいて、こんな素晴らしい所は初めて…と思いました」と言う。ここまで雨尽くしで終わっている私達は、明日からに大いに期待した。

結局夜の11時頃に帰る。13000歩。三連泊は今晚で終わり…。トランクを移動用に片付ける。

◇6月12日（金）石鼓鎮 虎跳峡 シャングリラ

まず長江第一湾に寄る。馬蹄形カーブというものは、あちこちで見所になっているが、水面に近い車道から全容を見るのは難しい。まあ、足を伸ばしに、降りたようなもの。

ただし、ここが、雲南三江併流と言う名で、世界自然遺産になっている。中国のチベット高原に源を有する3つの川、金沙江（長江上流部）、メコン河上流部、サルウィン河上部は、ここまで併流して、以後分かれていく。横断山脈の大部分といえるわけだが、深い谷と広い河で遮断され、一帯は動植物層が豊かというこ

とになる。それはヒトも、少数民族が多数暮らす地域となっているのと同義だ。



《長江第一湾》

かつては三峡下りという観光もあったが、ダム建設で不可になった。ここでの水力発電量は世界一を誇り、東南アジアに売られている。東南アジアといえば、悪名高いトクリュウは、中国内では監視が厳しいからやれず、ミャンマーなどが活動拠点になり、中国人が仕切っている。親としてのヤンさんも、息子には「闇バイトの電話は切れ」と注意しているそうだ。



《鉄虹橋》

そこから近いのが石鼓鎮。2005年、高倉健主の「単騎千里を走る」の撮影があったのが、麗江の石鼓鎮だという。言葉の通じないまま、村人はキャストを務め、そのご縁で、村の洪水時に、高倉健は多額の寄付をしたそうだ。それで、親日家の多い村なのだという。その鉄虹橋を渡った時、いかにも懐かしそうな顔で「リーベン？」というおじいさんがいたので、にこやかに握手をしておいた。



《村の名の由来 石太鼓》

チベットとの中継地点として栄え、共産党軍が長征の過程でこの地で河を渡ったことでも知られるらしい。記念館には、共産党軍のたくさんの写真が飾られていた。ヤンさんは「ここに3代前でも映っていれば、今は億万長者ですよお」と言う。この人は時々、憂さ晴らしのようなひがみを漏らす。



《共産党軍長征のジオラマ》

行政区は、省＞市＞県＞鎮＞村の順になる。ヤンさんの父は、鎮のレベルの役人だったのだ。47 都道府県のようにいうと、34 の一般行政区があり、22 省5自治区、4 直轄市、2 特別行政区が、内訳だ。5 自治区とは、内モンゴル、新疆ウイグル、寧夏回族、チベット、広西チワンであり、直轄市は北京、天津、上海、重慶、特別行政区が香港、マカオだ。

中国人民としてはどう思っているのか？はそれなりに関心がある。ヤンさんの場合は、少数民族は懐柔策のために何かと優遇され、一般市民はそれで割を食

うが、結果的に、中国が大きくなればいいと考えているらしい。台湾も、同じ民族なのだから、まず特別行政区になって慣れてから、省になればいいと思うらなかった。それ以上主張したら、ツアーでも「ブー」である。



《朝一と並ぶ農村風景》

台湾と中国…周恩来が共産党から逃れて、台湾へ渡り本拠地としたが、共産党の方が正統になった。政権争い時には、会津藩が突然朝敵にされたように、主軸が反転し、はて？の理不尽がおこる。自分は、どこまで遡ればどっちが正しい？を探る気などはない。子孫には、どうかうまく世渡りしてくれと願うしかない。

そこへ中国の旗をもった一団が入ってきた。いわゆる愛国勉強なのだ。なるほど、今も権威にはなびき、そう表明していればいいのだ。高楼に収まった村名由来の石鼓は、亀裂が入れば災難ありの予告と信じられたらしい。それらが一角にまとまっていた。

「単騎走千里」とは、元々は、三国志の中で、関羽が、曹操の再三の引き留め策にも関わらず、単騎で、劉備の妻子を伴い、劉備のもとに帰還するという話。京劇の有名な作品らしい。映画では、高倉がその京劇を取材し、疎遠になった息子との懸け橋にその映像を使う…という展開なのだ。これまで全然接点のなかったことを、異郷で耳にする…も、旅の面白さだ。

バス通りには朝市が出ていて、街中にも商店街が続いていた。地に足の着いた一通り買い物ができる田舎町で、長めの休みとなる。生け簀もある魚屋、豚の頭が転がっている肉屋、変わった野菜や果物、キノコ類の乾物も豊富。雑貨屋、電気屋も。ヤンさんが杏子を

買っている。私も、「3 元分だけ」の身振りで、クルミを少々買った。I 氏はどっかりと露店に腰をおろして、中国語で交流していた。バス内で食べた杏子は、見かけ以上においしかった。



《迫力の肉屋》

省境で、時間をとられる。ここからシャングリラ地区に変わるため、パスポートや身分証明書を提示しての手続きがいるらしい。前方には虎のモニュメントがある。金沙江はこの先 30m 幅の狭さになり、虎が渡ったとされる。その虎がジャンプした岩が虎跳岩で、その場所は虎跳峡と呼ばれる。その場所の上部に、車道橋と鉄橋が掛かっているのも見える。



《虎跳峡のエリアへ》

峡谷内の昼食場所へ来た。停められないほどにバスがぎっしりに驚いたが、昨日までの雨で二日間、虎跳峡は閉鎖されたらしい。晴天になった今日、一斉に観光客が動いたための混雑だった。昼食場所はここにしかない…ということで、運んでくる方も、三段の台車に 10 品ほどを全部乗せて…で対応していた。

それほどの客を迎えながら、トイレはバス停にあるトイレ棟だけなのだという。それがまた、インド式と

いうか、穴だけの代物で、おなかを壊して大柄の S 氏には何とも不快な設備だった。N 姉も膝が痛くてかがむのも立ち上がるのも辛いとこぼしている。ホテルはひとまず洋式になっているのだけれど、老人の多い中国が、毎日使う設備に関して、改良の方向にはならない…は、掃除が楽だからか？便座に接触するのが死ぬほど嫌なのか？まあ、判らない。



《台車で一気に運ぶ》

これに関しては、「それでもニイハオトイレよりまし」と言われたら、そう解釈し我慢するしかないか…であった。戸もついていないニイハオトイレには、1 か所（翌日の民家レストラン）だけ遭遇した。中国が信用できない…は、案外、こんなあたりに鈍感…が、あるかもしれない。

ここでも、ビールやスプライトの飲み物に揉めた。冷えているか冷えていないか、小瓶か大瓶か、缶か？ 1.5 リットルペットボトルか缶か？ 注文と、いざ出てくる品がいちいち違う。I 氏はますますイラつくし、私達も場所が変わっても毎度こうなる…に、首を傾げている。

急速に外側は変わっているけれど、一般大衆のいい加減さ、自分事じゃないし…はそれが実像かもしれない。

バスは峡谷沿いに進む。龍虎と並べるように、虎は中国お気に入りの動物だ。やたらとモニュメントがあり、それも中国らしい。4 段構えのエスカレーターで、水面近くまで下りられるのだ。

その 4 段構え部分はよしとして、バス停からエスカレーターの乗り口までと、下りてからの水面近くまでには、かなりの階段がある。最先端のような設備が、

前後とまったく整合していないのが中国だ。I氏は、もうバスでの居残りを決めた。



《峡谷とエスカレーター》

4 段エスカレーターの踊り場には、いちいち写真スポットがしつらえてあり、鳳凰の羽根とかが設置してある。下に着くと、川沿いにさらに奥にステージ状があるようだ。たっぷりの水量で、柱状節理の形状の岩に激しくしぶきが上がっている。対岸にも、観覧施設が見える。対岸は麗江となり、上部に玉龍雪山（見えない）が迫っている。こちらシャングリラ側上部には、ハーバー雪山 5396m（見えない）が聳えている。その落差は 3900mになるとか。



《激流の中の虎跳岩》

ネパールのカリガンダキ渓谷は世界最深で 6000m としているが、欧米に親和しているネパールに比べて、中国はかなりの情報ギャップがある。広い中国は並外

れた景色をもっている筈だが、それが欧米に喧伝されることはない。

かつて中華の名前の通り世界一の文明を誇った国は、欧米には、煙たい、理解しがたい文化圏だ。日本も評価差別に泣いているけれど、不気味な中国は、もっと門外漢扱いされ、気に障るのに、欧米中心の世界観の中にカウントされていない。地図も公開されないから、ランクインもしていない。

結果、隣国であっても、判らない…ばかりになるのだ。それを是としている国だ。その一方で、13 億人は巨大経済圏。取引額以上に、世界経済を底支えし、じわじわと、したたかに侵襲している…になる。

さてシャングリラ香格里拉はチベット族自治州の中心地（標高 3276m）で、チベット自治区および四川省とも境界を接する。映画化された『失われた地平線』（ジェームズ・ヒルトン著）の舞台になった理想郷シャングリラはこのエリアがモデルだと地方政府が主張し、2002 年に、中旬と言う名を改称して、香格里拉となった。梅里雪山 6740m を最高峰に、高峰が並ぶ。多くの物資を麗江から運んでおり、その分、物価は高い。



《ストウーパの並ぶ峠》

峡谷からは標高を上げ、なだらかな丘陵が続くようになった。五色旗がはためき、ストウーパが並ぶ。3200m の峠から振り返っても、ハーバー雪山は見えなかった。

この草原では冬虫夏草のような漢方薬もとれるという。ハダカ麦を育て、ヤクも 100 頭を持つから、チベット人は裕福だという。鳥葬、風葬のしきたりがあり、また、一人の嫁に兄弟全部が夫ともいう。そのあ

たりはチベットガイドからでも聞かないと、本当の所は判らない。

屋根からは棒が突き出ているが、これが3本あれば、その家から偉い坊さんが出ているという意味、2本は誰かが出家している、1本が普通の家の意味だそう。監視社会でもなかろうに見栄張りというか、大変だ。さっきからドライバーがせっせと酸素缶を吸っている。おいおい大丈夫か？



《重厚なしつらえのフロント》

その中心の、ビルが並んだところは、1.5km 四方に収まる程度で、その中に格上とされるホテルがあった。フロントは重厚な木彫りに囲まれ、部屋からの眺めはいいが、山の上は全て雲に覆われている。ベッドのそばの白物家電は酸素発生装置と分かった。また、トイレがウオシュレットなのもやったあ！だった。



《酸素発生装置》

廊下のつきあたりにはレンタル衣装があって、Mさんはさっそく宿泊客は無料をたしかめていた。

ここも土地が余っているようで、やたら移動して、離れた大部屋へ行き、広々会場にポツンと置かれた円卓二つでの夕食だった。味はどれもまるやかさがなく、辛い…そうか、中華も、日本はなじむ味付けに変えられているのだ。

◇6月13日（土） 松贊林寺、ナパ海

ホテルへの途中にあった金ピカ寺院は、松贊林寺といい、雲南省最大のチベット仏教寺院だ。明代末期にダライ・ラマ5世の発願で規模が拡大され、文化大革命で破壊された後、再建されている。雲南のポタラ宮とも言われる。仏教創始者の釈迦は、どこでも説法したのに、その弟子たちは、壮大で金ピカの寺院を欲しがり、それを見に行ったり、寄進したりも出てくる。

山門からは約143段を上がることになり、それが嫌なら、タクシーで割り勘にして乗り付ける手もあるとのこと。4人がその手へ回った。



《正面階段へ》

そこは標高のせいか、結構きつかった。上がったら、続きがまだまだあった。S氏はここで不整脈をおこしたそうで、今日の午後と翌日のロープウェイを欠席することになった。ここもチベット服のコスプレ参観が多かった。



《男性もコスプレ》

内部は撮影禁止という。多くの金ピカ仏像が密集していた。ネパールと同じ、経棚があり、カタ布もかけられていた。山中のネパールの方が、ずっと質実剛健を堅持していそうだった。さらに上へ階段を上がると、金ピカ装飾が間近になった。大太鼓を打っては、数珠を繰る僧侶がいた。ここでもポーズをとっては彼に撮影させているアベックがいる。



《金ピカの寺院》

その周りの店の、仏具や土産は、寄進を兼ねてか、かなりの金額をつけていた。私も少々ランクアップしてのマニ車を買った。

そこからは三台のタクシーに分乗し、民家レストランへ向かう。しおりには、田舎料理を食べてから少数民族民家訪問と書いてあったが、某家が、我が家をレストランに改装した所で昼食をとるのだ。

内庭をガラスで囲んだ、温室風のたいそう大きな家だった。満艦飾といえそうな部屋の2つのテーブルに所狭しと料理が並び、民族服の店主妻からバター茶を注がれる。塩気が勝つバター茶は、ミルクティーでも

なく、不可解な飲み物だ。料理の方は蒸しパンや、かりんとうみたいのや、おやつ風が多い。



《バター茶》

ここで思ったようなビールが出てこなかった。氏は席を外してしまった。後では、「甘ったるい臭いが嫌で、座っていられなかった」と弁明したが、外のテーブルでも何も食べなかったらしい。

そこから2階へ上がれば、民家を訪問した…に相当するらしかった。豪華なしつらえの長女の部屋に、豪華な仏間…。そこに飾られた肖像が、習近平と共産党重鎮だった。ネパールでも、ダライ・ラマと王族の写真が無難なタレントに変わっていったのを見ている。今ここでは、「習近平様様」なのだった。



《温室のような中庭》

帰路に周囲を見ると、新築している家ばかり。温室のように、ガラスが中庭を囲んだ大きな家ばかりだ。潤沢な補助金が出ているようで、いかにも豊かになった、いい暮らしに変わった…を、実演させているらしい。ただ、かつて、ダライ・ラマ14世が宗主の時代も、宗教者は寄進させていた。やはり支配者層とし

て君臨していたのだ。共産党政府と、宗教家と、どちらが正統で、民に支持されているのか？搾取側になっている点、同じ穴のムジナといったところ…。ともあれ、やたらと新築物件が並ぶ一帯が出現していた。



《ナパ海》

また雨が降ってきた。ナパ海というのは、シャングリラの北西 8km に位置する草原のこと…三方を山に囲まれ、雨季は湿原になる。ちょうどよい放牧地になるのだ。五色旗の円錐だけが、チベット区と告げている。花はどちらかといえば、周囲の山際に咲いているが、途中はバスを停められない。停められるのは、少々店が集まっている所、撮影用のヤクも雨に打たれ、暇そうに座っている。高山植物園があるが、閉まっていた。やや乾いた場所が、ピンクに染まっていたが、そこも素通り。



《独克宗古城》

最後に、シャングリラの古城、独克宗古城に向かう。そのトクソン古城は 1000 年以上の歴史をもつ 1 km² に満たないエリアで、チベット語では月光城の意味という。

ここも、土産店ばかりが並ぶ場所だった。やはり中央高台の亀山公園が、古城エリアを一望でき、巨大マニ車もあるという。そこへ行く人と、街中を散策する人に分かれた。私は、帰国したら中 5 日でピレネーになるせいで、財布も気力も節減モードになっていた。



《土産物店が並ぶ》

今反省するに、この 1 回だけが外遊なら、全てを見ておかなくてはもったいない！になったかもしれない。でも、出来合物の見物も、必要のない買い物も、全然気が乗らなかった。

それは、またたく間に観光地に変貌して、「金沢カレー」や「金沢おでん」ができ、名水カフェが出現し、アニメの聖地が人を呼ぶ…になった我が町に呆然も影響している。金亡者の思惑に振り回される観光地は、疲れる。



《チベット族の骨董店》

散策組に回った N 姉が、「気になる店がある」と言う。そこは骨董屋で、その中の彫り物の香合に気をひかれたという。それは水牛の骨からの彫り物で、似たような造りのキンマ技法の品を見たことがあるが…。

彼女はお茶のグループに入っていて、「こんなのを見つけてきたのよ」と、自慢したいらしかった。人にはいろいろな願望、煩惱というものがある。電卓を持ってきた店主は「800 元」を提示する。妹と離れた彼女の手持ちを広げると 400 円で、とんでもないとばかり手を振られた。「あと 200 元ならあるよ」と出すと、それで OK になった。彼女からは感謝されたが…私も、それで買い物イベントが済んだ気になった。麗江で結構値札をみていたので、15 元が 25 元になっているように、こちらは確かに高い…とは思った。



《チベット娘のイラスト》

早々に門外へ出ると、ここにもチベット娘のイラスト看板があった。イラストこそは日本のお家芸。マネキンより美人で元気で、スタイルが良くて、輝く日々と仮想させて…。その前では 4 人のコスプレ娘がしゃがみこんで、それぞれスマホをいじっていた。



《コスプレしながらスマホ》

自由なようで、身の丈に合わない理想と何かと比較されて…しんどい時代だなと思う。手近なあたりに少々で越えられる低い障害があるくらいが、精

神衛生には丁度いい。果てしなくつながって、虚飾の映像ばかりを見せつけられて、満足点が見つからないのは、辛いだろう…と私は想像してしまう。

もう、最後の夕食なのだった。ホテルから歩いてすぐのレストランに向かう。体調の悪い、S 氏と I 氏が抜けて、10 名でテーブルを囲む。3 人の歌手がテーブルを回ってきた。甲高い声でのラブソング。高地はその方が聞こえやすいのか？ネパールソングも甲高い声で歌われている。



《甲高い声でチベットソング》

明日の山こそは、もうちょい見えてほしいが…。バラマキ土産が必要という M さんが盛んに「スーパーがないのか？」と聞いている。

元気なことだ。その人達とは別れ、ホテルで荷造りに励んだ。

◇6 月 14 日（日） 石上下雪山～昆明

ロープウェイの始発に合わせてゆっくりの出発。

その余裕時間に、M さんは 2 着のチベット服の試着と撮影をやったという。真似できない。

バスからは、茶馬古道のモニュメントが見えた。

あの虎跳峡の上にも、茶馬古道が通っていたというが、今回はその伝承への探求はない。関連の茶店に寄るのも、空港へ行く前の、今日の午後となっている。私はそこで残金処分のつもりでいる。

雨季のせいか、乗り場には人がおらず、ガラガラだった。三台連結タイプのゴンドラが下りてくる。全員が同時に移動できるわけだ。

石上下雪山 4449m の読み方がわからなかったが、しかせつざんという。全体は、藍月山谷風景区で、こ

こも雲南三江併流の自然遺産の内となる。周囲には花が多く、また梅里雪山など周囲の山が一望できる場所…となる。

ただ、トクソン古城を蓮型の町と表現したり、8つの雪山が蓮型に広がっていて、しかざんがその中心という説明になったり、景色が良ければどこも藍月谷と、表現したり…。大げさで、画一的とも思う。



《三台連結のゴンドラ》

また、昔は英語表記もあったのに、今は漢字一辺倒風。それはスマホ翻訳があるからだろうし、中国こそ世界一…の意思表示でもあるのだろう。一流ホテルならフロントには英語堪能がいるものだが、今回のスーパークラスには、たどたどしいのしかない？ 人員削減されているのかもしれない。あまりにパンフレット類がないので、麗江のホテル備品の冊子を拝借してきたのだが、インターコンチネンタルだけあって、そちらは英語表記も並べてあった。

(今広げて見ると、麗江古城の背後に白銀の玉龍雪山が迫っていたり、印象麗江のステージのバック一杯に、玉龍雪山の屏風が広がっていたり。印象が全然違う。私は花にこだわったけれど、展望ベストはどう見ても晩秋から冬だ。ランタン・リルンが全く見えなかった、夏のランタン谷ツアーと同じだ。でも、四姑娘では、同様に山は見えずに、ブルーポピーなどの豪華な花園は堪能できている。やはり、ヒマラヤは、花をとるか、山の展望をとるかどちらかしかやれない。)

ゴンドラの足元には、シャクナゲの花が見える。花のシーズンは雨季にあたると判ってはいるが、雨の窓からは見えにくいし、写真にもならない。



《サルオガセ》

サルオガセがたっぷりと下がっていて、まさに、南国の高山だ。ヤンさんが、「空気の綺麗なここにしかない」と言うので、「日本にもあちこちにあります」と、やんわり訂正しておいた。

帰りにはここへ立ち寄る…という牧場 3800m の中継点で、第2ロープウエーに乗り換える。斜面には黄色のシャクナゲや、キリシマツツジ系も咲いてはいる。そして岩壁がせりあがってきた。



《4449m の山頂》

でも、山頂駅ではまた雨風になっていた。喫茶棟でそのまま待つ人と、200段の階段を上がって4449mのメイン展望台へ行く人に分かれる。

カッパに傘で、上がる。どの方面の展望もなし。もちろん、雲南最高峰で、1994年日中合同登山隊が全滅した梅里雪山6740mも見えない。最高所の4449mは、上半分を雲にふさがれて、ろくに高所感がなく、木段の先に、そう刻んだ石柱があるまでだった。周囲にはかろうじて、サクラソウ、エゾエンゴサク、チョウノスケソウあたりが見えた。

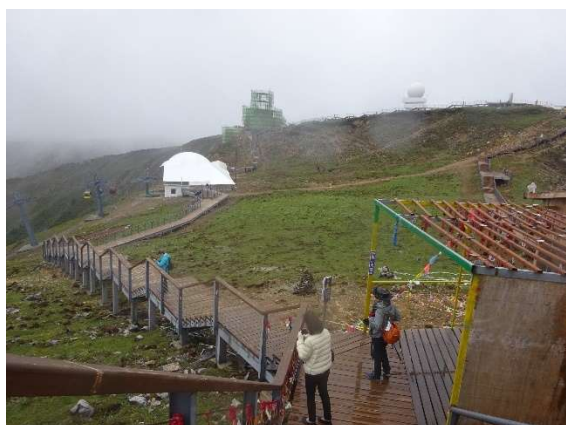
これが、モンスーンのあるヒマラヤ地域での花の咲き方だ。晴れ間に遭えたら超ラッキー。麗江の夜市で会った台湾女性は、その超ラッキーの日ここに来たのかもしれない。



《全然見えない梅里雪山》



《山頂周辺》



《山頂の施設》

中間点で降りる。牧草地の花々が咲いている。バスですっと見かけた黄色が、ベンケイソウの仲間と分かった。狼毒草と言う名で、牛や馬が食べないから、黄花の草原ばかりになっている…も、知る。レンゲツツジと同じ理屈だ。初めて見た…にあたるのは、エンレイソウのような全体像で、大きなピンクの花をつけて

いるものだった。雨に打たれているが、花園と言えば花園だった。



《サクラソウ》



《コケマンテマ》



《狼毒草》



《エンレイソウの仲間？》

戻りに通過したナパ海では、ようやくの雨上がりに多くのアベックがコスプレ撮影のため、草原に入り込んでいるのが見えた。大した背景もなしに…。だが、彼らなりに、急に開けた資本主義的自由を享受している姿なのかもしれなかった。

一旦ホテルに寄り、今日も待機を決めていたS氏とトランクを積み込んだ。チベット料理レストランへ。



《最後の食事》

「最後の揃っての食事ですから、会社から、飲み物を1本ずつサービスします」と高橋さんが言う。そうやって食事が一段落し、1本以上の場合の精算に掛かった時、I氏が「会社のサービスなんて受けたくないから、俺は全部払う!」とごねだした。

なんでも、昨日の夕食を、彼は案内があるものと待ち続けていたそう。5時半になり、外されたと諦めて外出し、自分でとったそう。「そうやって無視されたんだから、今さらサービスなんていらん!払う!」と札をたたきつける。

高橋さんの方は、「Sさんと同様に、『体調が悪く、午後からはパス』と理解しましたし、何度もそうと念を押しましたよ」…と言う。

また、私たちがトクソン城からホテルへ戻り、レストランへ移動したのは、5時半より後の6時半だった。段取りを聞いていれば、遅れていると判断したり、夕食がどうなったかを電話で確かめたりがやれなくもなかったのだ。

傍観者の私達は、各発言をチェックしたわけではない。しかし、これまで毎食ビール云々にケチをつけ、聞く耳もたずを通していたのはI氏であった。「夕食に

は参加する」と、判るように告げたのか?本人だけが勝手にそう解釈したのではないか?皆がそんな顔つきでいる。I氏はしつこかった。老害プラスの、自分を立てる…も加わって、問答無用とばかり、ごねまくる。

座はすっかり白けた。デザートのスイカ皿が忘れられたままになっていたのを慌てて食べて、外へ出た。Kさんが、「ああいう人は、ツアー会社のブラックリストに載るらしいですよ。すると、『キャンセル待ちです』と、断られてばかりになるんです」と囁いた。



《中国茶の店》

スケジュール通り、最終日回しになった茶店に寄る。中国茶はかつて、呉服店の催しで、体験したことがある。茶盆がミニ流しのようになっていて、茶器を温めたり、茶葉を清めたりに、盛大にお湯を流しまくる。最後に、いかにも薬湯のようにミニカップで、ようやくお茶が出てくる。



《茶馬古道の看板》

こんなにお湯で浄めたがる国が、食べ物に盛大に農薬をかけるものか?私は疑うけれど、知人からもらう

無農薬白菜の穴ぼこぼこを見れば、換金作物の場合は、別扱いでそうなるかも？とも思う。

今回、ビール騒動にもなったが、お茶を飲む国では、冷たい物は体を冷やすとして、ビン飲料も常温までだ。また、しょっちゅうボトルに注ぎ湯をしては飲んでいる。医者には手が届かない国では、それも理に適っている。

だからといって、発酵茶あたりまでは手が伸びず、何年物がありがたい…とも思えない。ご利益があるとも思わない。価値観はそれぞれだ。

この地域でとれるのは基本、全て、プーアル茶であり、つまりは雲南でしかとれない。古いほどおいしくなり、1000 年物もあるそう。紅茶がまだかぐわしいとして、腐った木材のような臭いがありがたく思えるか？

勧められたのは3種で、無難な生茶クラスを 100 元×2 個買い、ノルマ済み！とした。

シャングリラ駅から高速鉄道に乗る。また、トランク収めに一騒動をやった。

山岳地帯だからトンネルばかりで、また食後もあって、まずうとうとしてしまった。急なまぶしさにハッと目を開けたら、あの虎跳峡にかかる鉄橋を通過している最中だった。慌ててシャッターを押し、「あの鉄橋です！」と言おうとしたら、みな寝ていた。瞬時、峡谷と玉龍雪山の峻峰を見たのだった。



《虎跳峡と玉龍雪山》

次には麗江駅を通過した。ここも玉龍雪山が見えている所だった。今頃おでましか…。拝めたからよしとしよう。



《麗江と玉龍雪山》

ここで弁当が配られた。駅弁文化というものも、清潔順守の日本文化の内なのだろう。これは鉄道会社製造の定番なのだ。瀘江下りの時の、豆ととうもろこしばかりの鳥用弁当みたいのよりましだったけれど…繊細器用な日本から外へ出て、満足を得るのはほんと、難しい。半端で止めた。

それから隣の S 夫人と、一期一会の気楽な卯年同士でのおしゃべりで過ごした。

次の旅は？あちこちへ行きはしたが、やはりネパールは特別だ。シェルパの青年たちもソバナさんも日本語が使えたから、その国を知る…がやれた。最後は…でなくてもいいが、ソバナさんやデン君に会いにネパールへ…は、やろうと思っている。そう、答えた。実は 5 日後がピレネー出発だった。さすがにそうとは言えなかった。

23 時、昆明の、初日のホテルに着いた。明日は 4 時起きで空港へ。だから、仮眠程度。

◇エピローグ

翌早朝、朝食ボックスと定番アンケートを配りながら、高橋さんが「実は、あとのツアーは、みんななくなりまして、今年は、これ一本ということになってしまいました」と言った。

自分にとっては他のツアーにまで、何かと影響してしまった玉龍雪山…そういう因縁のツアーが、1 本きりで終わったと聞いたら、それなりに感慨深かった。



《民族服での参詣》

成田空港のトランク受け取りの場所で、いつものように流れ解散となる。ここで、Mさんが親身に高橋添乗員を慰労していた。彼女は最初微笑みながら涙をぬぐっていたが、そのうち抱きついて泣いていた。

冷やかかそうなMさんがもう109か国を回った…と言っていたのは、そして何かとホテルサービスにうるさかったのは、案外と観光方面の仕事に関わっていたのかもしれない。

クレマーの増えた時代に、添乗員はかなり辛い仕事だ。不整合も、手抜きも、トラブルも、全てが添乗員にかかり、善処を求められる。高齢者が増え、男尊女卑もからみ、厄介は増えていく。

それゆえ、他のどんな仕事より遣り甲斐があると思う人もいることだろう。



《右・玉龍雪山、左・ハーバー雪山》

インバウンドの行き交う金沢へ戻った。その客層は、白人系で、中国のコスプレ自国民で賑わう古都とは違う。そして、兼六園、ひがし茶屋の間に位置する我が家界限なら、8割がインバウンド…トランクをひっぱ

っている、全く違和感がない。我が家に入るまで、「ここは、どこ？」状態だ。住人には、騒々しいだけの観光化…。B&Bより、貸家にでもするか…。

そういえば、礼文島から帰宅しての早朝に、電話が鳴った。篠笛の師匠からで、入退院を繰り返していた妻が亡くなったこと、その動顛で事故をおこし自分は入院中であること、稽古は休み…を告げられた。ひと昔前なら弟子筆頭がこんな取次ぎをしたのであろうけれど、今は、そんなワンクッションなどない。こちらでも、返答に窮したまま、電話を置いた。そのまま中国出立になった。

帰宅した今、それを思い出し、I氏の不機嫌も思い出した。何かと補佐役をやっていた小柄で愛嬌のあった奥様…さて、どうしたものか？

でも今の自分は過密予定に直面し、ドジをやらないこと、気力・体力を持たせること…に全集中をやるのみ。

かごを用意し、トランクの中身は全部そこへ入れ、トランクに風を通す。洗濯し干した物は、またそこへ戻った。人民元をユーロに…それでピレネーは始まるのだった。本当の休息は、ピレネーが済んでからだ。こんな年があってもいい。こんな6月があってもいい…。

これを書いたのは、ピレネー〈6月21日～30日〉から帰国後、5日間の爆睡をやってから、7月9日。最短のエピローグになった…。

—完—